

山大学生によるフィールドワーク(実地調査)



成田しも寿会(ミニデイ)での調査



道の駅には、紬の加工品が並ぶ



染色の技法を学ぶ

調査を行った山大学生

山形大学人文社会科学部人文社会科学科地域公共政策コース

講師：本多広樹

学生：阿部天音、阿部光希、菅藤駿太、嶋田 葵、中川優輝、
山口 恵、山内菜那

2回目のフィールドワークでは、「成田しも寿会」のミニデイサービスの皆様にご協力をいただきお話を伺いました。当日は、主に60〜80代の17の方に学生が直接質問しお答えいただきました。まずは、「長井紬」の所有について聞き取りを行ったところ、17人のうち11人の方が着物を所有していることがわかりました。所有している方は概ね、「嫁入り道

[10月13日(火)]

調査先	調査内容
渡源織物工房	長井紬の概要 (歴史・製法)
道の駅 川のみなと長井	長井紬を活用した 商品展開について



[11月18日(水)]

調査先	調査内容
成田しも寿会 (ミニデイ)	長井紬の所有調査
渡源織物工房	企業概要 (生産・販路)
致芳コミュニティセンター	致芳地区と コミセンの概要

[アンケート]

調査先	調査内容
致芳小学校児童 (4〜6年生)	地域(文化)や 長井紬への関心
致芳小学校教員	地域(文化)に 関する教育方法等

具」の1つとして親に仕立てていただいたようです。ちょうどその頃は、高度経済成長の真っ只中の時代であり、特に昭和38年〜39年頃は、「シルクブーム」とも呼ばれ、「長井紬」も受注に追いつかない状況でした。その当時に流行したのが「アンサンブル」と言われる着物と羽織のセット商品です。

しかし、所有はしているものの、未だに1度も袖を通したことがないという人も多くいらっしゃいました。理由としては、「長井紬」に限らず、「袖」は、一般的に訪問着と言われており、フォーマル(正装)な場面には相応しくないということである機会が限定されてしまいます。また、着物は着付けや髪のセットなどにも時間と費用がかかったり、年齢を重ねることに体への負担もかかるといった問題も見えてきました。中には、こうした着物を手提げバックやスモック、ジャケット、おんぶひも(ねんねこ)、どんぶく(半纏)などに加工して再利用された方も多くいらっしゃいました。

